

災害ボランティア、支援先の家族と結ばれ就農

安全・安心なわが作物 子どもに食べさせたい

陸前高田市の落田^{おちだ}知樹^{ともき}さん(53)は、「子どもに自分の作ったものを食べさせたい」と京都から移住し1年7カ月。妻の千春さん(44)と共に理想とする農業をめざし取り組んでいる。

13年前、東日本大震災津波の災害ボランティアの一員として、初めて同市を訪れた。支援活動先の家族だった妻と出会い、2012年9月に京都で結婚。連休や休暇を利用した支援活動が続けた。

一方、安全・安心な食への思いから京都で無肥料無農薬栽培を学び、市民農園や畑を借り、片道1時間30分かけて通作。住居、農地、職場が近い移住先を探した。

そんなある日、陸前高

落田さん 京都から陸前高田市に移住

田市の義母が、近所で希望に合った住宅と農地を発見。知樹さんも勤務先を見つけた。当初、選択肢になかった同市への移住の道が広がった。

自宅前の38坪の畑は、家族で相談して「こはく農園」と名付けた。ブルーベリーやキウイフルーツなど成木が19種類並ぶ。農地の前所有者は「農地も家も大事に使っている」と喜んでいる。

知樹さんは「種にこだわりの堆肥だけで作った安全・安心な果樹や野菜の良さを多くの人に伝えたい。また、妻が得意とするジャムは、知人らに好評で本格的に販売していきたい」と語る。

(陸前高田市農委会・菅野光二情報員)



ナツメの木の前で知樹さん(左)と千春さん